6-10	演題	多職種連携
	副題	～多職種で理解し合い利用者の利益につなげる～

		法人名	社会福祉法人 横浜市福祉サービス協会
		施設名	横浜市福祉サービス協会　ヘルパーステーション栄

発表者名（職種）	里見　麻理 その他
共同発表者	齋藤　希実
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市栄区桂町 728-1　セルディ本郷台１階
TEL	045-897-1910
FAX	045-897-1911
メールアドレス	j-sakae@hama-wel.or.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	私たち横浜市福祉サービス協会ヘルパーステーション栄は、ご高齢の方や障害をおもちの方のお宅に訪問し、ケアを行っています。お客様のご満足を第一に、ご本人はもちろんご家族を含め取り巻く環境全てに配慮したケアを心がけています。

研究の目的、PR ポイント

在宅介護では、他職種連携が大切と言いますが、実際はどうでしょうか。職種同士のつながりを強化し、他職種の動きも把握し理解し合うことで、より質の高いケアを行うことができると考え、この研究に取り組みました。

取り組んだ課題

他職種連携と言っても、実際はケアマネジャーを中心とした一対一での電話がほとんどで、直接顔を合わせる機会はほぼありません。サービス提供責任者として働く中で、他職種を視野に入れたケアができているか、また、他職種との関わりの薄さを感じ、なんとかしなければならないと思いました。そして、以下の３点が課題と考えました。

- 職種同士の専門的情報の共有機会がない
- 職種間に心理的距離がある
- 連携のほとんどがケアマネジャーを中心としている

具体的な取り組み

- 三職種連携会議の開始
  月に一回、当ヘルパー事業所と、同法人内の同じ地域を管轄するケアマネジャー事業所、訪問看護事業所の三職種の管理者で会議を開始しました。
- ヘルパー研修への他職種の参加を開始
  当事業所で月に一回開催している全ヘルパーを対象とした研修に、同法人内の看護師と理学療法士・作業療法士を講師として招きました。
- ケースの検討
  ヘルパーをはじめ、看護師、理学療法士などが関わっていたＢ様。脊柱管狭窄症と腰椎圧迫骨折の既往があり、徐々に立ち上がりや歩行が不安定になり１人での入浴が困難になってきたため、ヘルパーと看護師とで週に１回ずつ計２回の入浴介助を開始しました。看護師が入浴介助を行ったある日、浴室内で移動時にバランスを崩して転倒しそうになったことがあり、Ｂ様・ご長男・ケアマネジャー・理学療法士・看護師・ヘルパーで集まって会議を行いました。

活動の成果と評価

三職種連携会議を開始して・会議を通して専門的な決まりを共有・把握しておくことができ、職種間でケアを分担でき、ケアの方針を円滑にすすめられるようになりました。

- 連携をとる中で改善してほしい点を時間をとって話し合い、改善・評価し合うことで友好的な関係を築くことができました。
- 非常に話しやすくなりました。ケアマネジャーを介しての連携だけでなく、直接職種同士で相談した上で最終的にケアマネジャーに共有することも増えました。

ヘルパー研修への他職種の参加から

- 職種同士で研修内容を一緒に考えたことで、お互いの仕事についての理解と尊敬につながりました。
- ヘルパーからは「一緒にケアをしている人がわかって良かった」、看護師と理学・作業療法士からは「困ったらいつでも相談してほしい」と、心理的距離を縮めることができました。
- ヘルパーと看護師がともに支援している精神障害のＡ様に関しては、職種同士のつながりを伝えられたことでヘルパーに対する緊張感が減っていき、徐々にコミュニケーションがとれるようになりました。

ケースの検討から

- ケアの統一や職種間のつながりの強化ができました。
- 問題に対してどの職種が中心となって解決していくかを決めることも重要であると気づきました。

今後の課題

今後も、職種同士の会議や交流を継続していかなければなりません。大切なのは、これらの取り組みを続けていき、定着させることだと思います。
また、今回は同法人内での会議や交流としましたが、さらに範囲を広げていくことも必要であると思います。